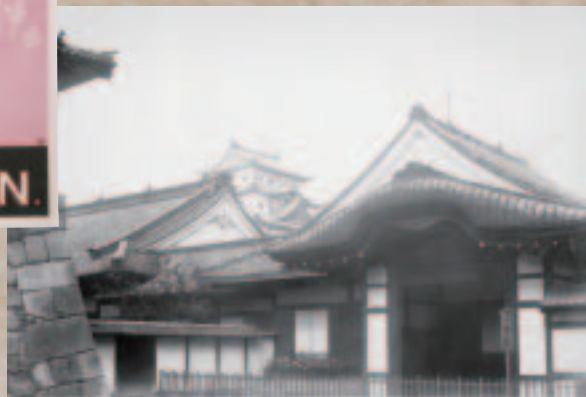


29

2011.03

新修

名古屋市史だより



名古屋市市政資料館

第26回「新修名古屋市史を語る集い」から

資料編「考古2」の内容を紹介

「新修名古屋市史」編さん事業は、本文編に続き平成十四年度から資料編の編さんを行ってきましたが、江戸期の完結編となる「近世3」を今年三月に刊行し、五月から発売できる運びとなりました。続いて二十三年度には「現代」を、さらに二十四年度には「考古2」、二十五年度には「近代3」をそれぞれ発刊する予定で、鋭意作業を進めているところです。

こうした中、昨年十二月十一日、ウイルあいち(名古屋市中区)で開催しました「第26回新修名古屋市史を語る集い」では、「考古2」について、その内容の一端を二人の執筆委員に講演していただきました。会場には多くの市民や歴史愛好家の方々が訪れ、二時間半にわたる充実した集いとなりました。今回はその内容をご紹介します。

資料編「考古2」から

歴史遺産の宝庫 名古屋城

「築城四百年に考える」

「考古2」執筆委員 木村 有 作

(名古屋城総合事務所整備室学芸員)

名古屋城総合事務所整備室学芸員の木村有作と申します。

私は名古屋生まれで、木曾川から取水した水道の水の産湯につかり、大学のときを除けばほとんど名古屋で過ごしました。当然名古屋城はずっと昔から歴史的なシンボルとして見ており、金鯱のもとで育ってきたと自分でも考えております。

今年、名古屋城の築城から四百年という非常に記念すべき年に当たり、本当に大勢のお客さんに来ていただきました。特に一〇月にはいろいろなイベントをさせていただきました。ただ、とりわけ一〇月一七日の名古屋まつりのとき

どは、二万人を超える方々に入場していただくことができ、大変ありがたく思っております。

最近では若い方にもたくさん来ていただいております。特に人気なのは「おもてなし武将隊」です。いわゆるイケメンの、二枚目のハンサムな人たちがやっている武将隊に非常に人気が集まっております。とにかくいろいろな方に来ていただいているのは非常にありがたいと思っております。

只今、名古屋市が、本腰を入れて取り組んでおります本丸御殿の復元は、皆様のご寄附、ご協力のもと、鋭意進められているところでございますが、今年の一〇月に、その途中経過として玄関部分を公開いたしました。まだ途中ですから屋根裏の構造が見えるような状態でしたが、模写の虎の絵なども少しご紹介しながら公開しました、これも大変ご好評を得ております。

ところで、お城の水堀のことですが、私が修理を担当しております搦手馬出(からめてうまだし)の下のところは南波止場というお殿様が使っていた波止場がありまして、そこから西北隅櫓のところまでお堀めぐりをするイベントもさせていただきました。昔からここは本当に殿様し



か立ち入れないお堀だったので、恐らく庶民でこういうことを経験できたのは今回だけかと思えます。そういったイベントにも非常に大勢の方に来ていただき、いろいろな形で名古屋城の魅力を再確認していただけたのではないかと思っております。

今回もそういったことにつながるお話ですが、名古屋城というのは、演題にも挙げましたように、歴史遺産が大変たくさん眠っております。単に天守閣とか金鯱だけではなくて、とにかく名古屋城にはいろいろな歴史的な情報、物語が詰まっています。ほんの若干ですが、でも、そういうところの一端をご紹介します、また皆様に名古屋城をより楽しんでいただけるようにしていきたいと思っております。

名古屋城には、実は私も勤務先になるまでよく認識していなかったのですが、いろいろな文化財がございます。今、法的に文化財として認められているものだけでも、本当にたくさんございます。まず、城の主要部である本丸、二之丸、西之丸、御深井丸と呼ばれるところが、国特別史跡名古屋城跡ということで、全国でも八〇例ぐらいいしかなない特別史跡になっております。単なる国の指定史跡ではなくて、特別史跡として指定されているところで、主要部はもちろんのこと、三之丸の外堀も国特別史跡になっております。今年も一部公開されていたので、行かれた方もあるかと思えます。

それから、意外と知られていないところで、名勝二之丸庭園という二之丸御殿に付けられましたお庭があります。話題としてはどうしても本丸御殿が挙がるのですが、けれども、二之丸御殿というのは、元和以降、江戸時代のほとんどの期間、名古屋城の藩主が住まわれたり、あるいは藩政の中心となりました。本丸は象徴的な部分という

ところがあるのですが、二之丸は実際の政治の舞台として使われていたのです。その庭園が今一部残されておりまして、国の名勝になっております。

それから、ご存じのように、重要文化財の建物があります。何度か機会を見つけて公開しておりますけれども、三つの隅櫓と三つの二之門と呼ばれている高麗門があります。残念ながら櫓門はすべて焼けるか、壊されて無くなっておりますけれども、そういった建物があったり、それから、これは非常に重要な国の宝だと思うのですけれども、旧本丸御殿の障壁画も重要文化財として指定されております。

それから、意外に思われるかもしれませんが、歴史的なもののプラス自然のものとして、天然記念物に指定されているカヤの木が城内にあります。推定樹齢が六百年ですので、築城より前からそこにあったと言われています。

あるいは、明治期の建物として市内最古の現存煉瓦建築物「乃木倉庫」があります。明治初頭の建築という説もありますけれども、今の研究者の方は実際のところ明治二〇年代ぐらいだというふうに言われております。これは指定ではなくて、登録有形文化財となっております。近世の建物の基礎というのは、今本丸御殿を立ち上げておりますので、ほとんど見ることができません。

あともう一つ、今回のテーマであります考古学から見た名古屋の文化財ということであれば、埋蔵文化財となります。もちろん本日のお話の重要な部分は近世の名古屋城の遺構ですけれども、実はその前にも、古代の集落遺跡ですとか中世の那古野城跡も含んで、非常に重要な埋蔵文化財が今の名古屋城の下に眠っていますので、このことも記憶の片隅にとどめていただければと思います。

ざっと挙げられるところでも、こういった歴史遺産を現在の名古屋城の中で紹介することができます。

まず、名古屋城の立地についてお話いたします。考古学の場合、地形が非常に大事です。その遺跡がどこに立地しているのかということが、遺跡を考える上で非常に大事になってくると思うのですけれども、この名古屋城というのは、そういう意味では非常に典型的な場所にあります。お城の建っている所は、名古屋台地という台地の西北端にあたり、西側には水をたたえたお堀があり、南へは堀川が、北へは黒川がずっと続いていきます。城の北側が今の名城公園、江戸時代には御深井御庭と呼ばれていた部分で低くなっております。この水堀は台地の下で、非常に水の湧きやすい湿地帯を利用してつくられているわけです。

家康がなぜ今から四百年前の慶長一五年（一六一〇年）にここに名古屋城をつくろうとしたかというと、やはり地形的な問題が非常に大きいと思います。それ以前の那古野今川氏あるいは信長の父親であります織田信秀がお城をつくったのは二之丸のあたりです。搦手馬出を含むこのあたりに中世の戦国時代的那古野城があったのです。やはりこのお城も、断崖といえますか、台地と低地をうまく利用した城であったことがわかりますけれども、さらに近世の名古屋城は、御深井丸をより低いところに張り出すなどして、この台地の北西部の、要害といえますか、非常にいい立地のところを上手に利用したお城だと考えております。北西の方はずっと平野が続きまして、その先に木曽三川が、さらにその向こうには伊吹山、関ヶ原がある。そういう地勢でございます。清須とは本当に指呼の間という感じです。

もう一つ大事なところは名古屋台地ですけれども、この名

古屋台地の南の端はほぼ今の熱田神宮に当たります。俗に熱田は、伝説上の仙人が住む神仙の土地になぞらえまして、「蓬萊山」とよく言われます。熱田さんの近くで井戸を掘ると亀の足とか頭とか甲羅が出てくる、などと言われておりましたようで、蓬萊山が亀に乗っているという伝説があるものですから、つまり熱田は蓬萊の地だということでもあります。それが名古屋台地の南の端なのです。ね。そして、ずっと北へ上がっていつて名古屋城のところで終わるのですけれども、京都から見ると右に熱田の蓬萊があつて左に名古屋城があるということで、名古屋城は、蓬萊の左、「蓬左城」と言われております。今も蓬左文庫という徳川美術館に隣接する施設がございますけれども、その名前の由来もこのようなところからきているといわれています。

この「かめ」というのは生きた動物の亀なのですが、これが同時に水がめも意味します。この後の水野氏の講演でも水の話が出てくると思うのですけれども、名古屋台地では、雨が降ると、そこにしみ込んだ水がたまつて、ある程度のところで付近の低いところへ流れ出していきます。一種の水がめ、タンクであるということです。こちらには入れ物のかめなのですけれども、入れ物のかめでもあり、生きた亀にもなぞらえられるような名古屋台地として、地形だけではなくて歴史的な意味も含んだ場所に立っているということなのです。山下氏勝が推薦する三つの候補地のうちから家康が今の名古屋城の土地を選んだのは、現実的にいえば熱田との距離が近かったということもあると思うのですけれども、一つはそういった地形から選ばれているのではないかと考えております。

これからお話しするのは、特に私の専門であります考古学でいけば、石垣の修復工事ということになります。

見晴台考古資料館に在る八年ぐらい前から、この搦手馬出という場所の北東の角の修理をするという形でずっと名古屋城で仕事をしているわけで、今日はまず石垣を中心に話をさせていただきたいと思います。

名古屋城の場合、石垣が特徴的といいますが、重要な要素になります。特別史跡になっているのも、やはり石垣づくりの城であることが非常に重要な要素ではないかと思ひます。名古屋城の石垣の特徴は、徳川幕府だけでつくるとはなくて、「天下普請」あるいは「割普請」という言い方をしますけれども、かつての豊臣の配下であつたいわゆる外様大名、北国・西国の外様大名二〇家に命じて石垣をつくらせているということです。今ではジョイントベンチャー（JV）という言い方をするみたいですが、そのほかに大規模なものだったかと思ひます。確かに徳川家康の城であつて、徳川家康が自分の息子である義直のためにつくつたような城であります。義直の上に忠吉という息子がいたので、彼が二八歳の若さで早世しなければ彼が城主になつたかと思うのですけれども、そういった天下普請、割普請を名古屋城で実施しております。

もちろん有名なところでは、大阪城、江戸城というのがございます。名古屋城ができた慶長一五年（一六一〇年）は、関ヶ原の合戦からすでに五年たつておりますけれども、まだ豊臣家が存続しているところで、家康は非常に危機感を持っておりました。それで、城をつくつて豊臣家、大阪を包囲するような形にするのです。古い清洲城ではとても対応することができないということで、東海道の要衝として新しい名古屋城が企画され、築かれたのではないかと考えられます。その中で特徴的なのは、やはり石垣を割普請、天下普請でつくらせたということが非常に大きな歴史的事実ですので、今我々に残された遺産は

天下普請によってつくられた石垣であるということを感じていただきたいと思います。

今「普請」と言っております言葉を少し説明させていただきます。現在は家を建てることを全部「普請」と言ひますが、昔は基礎工事、土木工事のみを「普請」と呼んでおりました。建物を建てるのは「作事」という言い方をして、非常に厳密に区別しておりました。そして、土木の「普請」の方は割普請、天下普請で外様大名にやらせるのですけれども、建築の「作事」の方は徳川幕府自身でやっております。よく誤解されるのですが、確かに加藤清正が一人望んで「私が天守台をやる」と言つて手を挙げ、名古屋城の非常に大事な記録である幕末の『金城温古録』という書物にも、天守の建物まで清正がつくつたと書いてあるのです。つまり、それほど築城に関して清正の印象は強いのですけれども、事実としては、清正がつくつたのは天守台、石垣だけで、金鯢も含めた上の天守の建物については、幕府がデザインし、設計し、施工しているのです。

名古屋城の計画を考える上で、宮内庁の所蔵する「名古屋城御城石垣絵図」という重要な資料があります。「縄張り」と言ひますが、これを見ると、各大名がどういふふうに割り振られていたかが分かります。例えば、御深井丸のところを見ますと、わずか一八〇坪のところにも二〇ぐらいもの大名がひしめき合つています。繰り返し名前の出てくる大名もいるのですけれども、非常に細かい担当割がされています。ただし、清正だけは天守台を担当するというものでしたので、大天守、小天守の石垣は清正が単独でつくっております。あとは一九の大名でいろいろなところを割り振っております。

次の資料は、割普請の大名の一覧です。石高の多い順、つまり力の強いお金持ちの大名から順に書いてあります。

大名	領国／居城	石高(概数)	
前田利常	加賀・能登・越前・金沢	一〇三万二七〇〇石	あとは、知
池田輝政	播磨・姫路	八十八万七五〇〇石	つている名
加藤清正	肥後・熊本	五十二万石	前もあれ
堀島正則	安芸・備後・広島	四十九万八二〇〇石	ば、知らな
浅野幸長	紀伊・和歌山	三十七万四二〇〇石	い名前もい
鍋島勝茂	肥前・佐賀	三十五万七〇〇〇石	っぱい出て
黒田忠政	筑前・福岡	三十一万石	おります。
田中忠政	筑後・柳川	三十万二〇〇〇石	この大名た
細川忠興	豊前・小倉	三十万石	ちは、豊臣
毛利秀就	土佐・高知	二十万二六〇〇石	秀吉のもと
加藤嘉明	伊予・松山	十九万六六〇〇石	で天下の経
蜂須賀重頼	阿波・徳島	十八万六六〇〇石	営に参画し
寺澤高広	肥前・唐津	九万五二〇〇石	てきた、西
生駒正俊	讃岐・高松	八万五九〇〇石	国で城づく
稲葉重通	豊後・臼杵	五万石	
金森可重	飛騨・高山	三万八四〇〇石	
木下延俊	豊後・日出	三万石	
竹中重利	豊後・高田(府内)	一万九〇〇〇石	
毛利高政	豊後・佐伯	一万九〇〇〇石	

りあるいは町づくりをいろいろと経験し、さらには朝鮮の役では向こうで倭城をつくつてきた、そういったメンバーが中心になっております。ですから、当時で言ひますと非常に土木上手といひますが、工事が非常に得意な大名の名前が並んでおりまして、家康はそういった大名の力を非常にうまく利用して名古屋城の石垣をつくらせております。

恐らく単独では、これだけの大規模な石垣はできなかったでしょう。三之丸を入れますと全長八キロぐらい、主要部だけでも六キロぐらいの、一番高いところで二メートル、平均七、八メートルぐらいの石垣をつくっております。石の数をよく聞かれるのですけれども、一〇万個と言つたり二〇万個と言つたり、実はまだあまりはつきりした数はわかり

ません。とにかく数え切れない石材が使われ、作業をした人たちの数も一〇万、二〇万ぐらいになると思うのですけれども、ちょっと我々では想像できないような規模の造作を、清正の天守台でいけばわずか三カ月、ほかのところでも八〜九カ月ですべてやってしまった。石垣の工事だけですけれども、非常に短期間でやってしまっている。大変驚異的な工事が行われ、それが今の名古屋城の石垣だということになります。

ここからは石垣の修理の話させていただきます。それが石垣の中身を語ることもなるのではないかと思うからです。石垣も四百年も経ちますと、所々出っ張ってきます。そうなってくることを、女性の妊娠したおなかに例えまして「はらむ」とよく言います。これは石垣用語なのですけれども、最近流行の言葉で言えば「メタボ」になったというところでしょうか。石垣の出っ張ったところ、異常なところを直すのが石垣修復工事ということになります。ちょうど今修理しておりますのは、本丸搦手馬出の水堀の部分です。実はここから今年お堀めぐりをさせていただいたのですが、そこにある石垣のところを直しております。

本丸搦手馬出の石垣の修復ということですが、実は名古屋城の石垣は四百年前の一六一〇年につくられたのが最初でありまして、中世・那古野城の石垣は今のところ見つかっておりませんので、古くとも四百年前の石垣ということですね。あとはいろいろな時代に手を入れて直している。自然災害で崩れたり、あるいは手抜き工事があったということも聞いておりますけれども、そういった工事の不備で簡単に崩れてしまったり、また、はらみといいますかメタボになった石垣を直しています。そういうことでいろいろと直すことが石垣の歴史みたいな形になります。

もちろん築城期の石垣も残っておりますし、江戸時代に直している石垣もございます。尾張藩のときに直している石垣や、それから、明治になって、陸軍、あるいは本丸ですと宮内省が入ってくるのですけれども、そういった国の機関が直したものもあります。昭和五年に、本丸を中心とした部分が、当時の言葉でいうと下賜ということですが、名古屋市に移管されております。それでもまだ陸軍はおりまして、二之丸に第六聯隊がいましたが、戦後になって、今度は史跡、観光施設として活用していくというときに、やはり修復工事が必要だということで直しております。

近年、特に搦手馬出の石垣が修復されるようになってからは、単に石垣を安全面のために直すのではなくて、景観として、石垣の伝統的な工法も視野に入れて昔の歴史的な景観を復元する。現代工法だけで直すのではなくて、当時の伝統的な石垣技術も含めてもそのような形に直すということで、二〇〇三年以降は、少し文化財的な意識を注ぎ込んで史跡整備をしようという考え方で搦手馬出の石垣の修復をしております。

今年お堀めぐりに来られた方はここから入っていたのですけれども、今は長期通行止めにさせていただいております。もとは大きなムクの木が生えておりましたけれども、ここに御春屋門（おつきやもん）という搦手馬出の南の入り口、南の枅形があります。このもとの石垣も、工事のときに車両を搬入したり、内堀側が膨らんでおりましたので、そこも最終的には直すということで、まず最初にこの御春屋門の北側枅形と呼んでいる部分を解体しております。今日はそのあたりのところでお話をさせていただきたいと思います。

次の写真は、修復をする場所を示したものです。なぜ



修復しなければいけないかということで、これだけはらみが出ている様子を紹介させていただいております。この東北の隅には櫓台がありますが、残念ながら当初から上に建物が無かったと言われています。櫓台だけがあった部分ですけれども、そういったものをはずしていきます。石垣の場合、とにかく上からはずしていかなければいけないのですから、仮の足場を組んだりして、非常に手間とお金を使わせていただいて修理をしております。

石垣の裏は、なかなかごらんに入れることはできないのですけれども、石垣の裏にはぐり石と呼んでいる石がございます。内側に盛り土をして、石垣の石材と盛り土の間にぐり石を入れます。これが実は石垣の構造では非常に大事な部分でありまして、これの質が高いか低いかで石垣の寿命が決まってくるのではないかとはいくらか重要な部分になります。石垣を解体するときは、もちろん測量もするのですけれども、測量した後、まずは図面に番号を振りまして、実際の石にも一石一石に番号を振って、図面と照合できるように取り上げていきます。

ぐり石の部分の一番理想的な直し方は、大きな石と小さな石が適当にまざり合って隙間を充填し、なるべく隙

間が生じないように埋めていくことらしいのですけれども、この石を手に入れるのも非常に大変だったと思います。といいますのは、いわゆる川原石が一番いいのですけれども、近いところでは矢田川や庄内川あたり、遠いところでは木曾川あたりから運んでこなければいけませんし、相当な量の石が要るわけです。もちろん石垣の高い低いはあるのですけれども、これを全長六^{キロ}から八^{キロ}全部に使っているということです。目に見える石材だけではなくて、非常に大量の石ころまでが名古屋城に運び込まれていたわけです。

このぐり石の重要さを申し上げておきます。これがなくて土が直接石垣に当たっておりますと、土というのは水の影響をすぐに受けますので、水が入ったらどんどん外へ流れ出てしまいます。緩衝地帯であるぐり石がなければ、すぐに石垣を押し出して、恐らくあつという間に崩壊してしまうと思います。それをぐり石の部分で調整すると、これが緩衝となる。これを通して土がどんどんしみていきますと、多少は膨らみ出しがでてきますが、ある程度のところで止まります。そして、それがまた安定します。そういつたところで一回止まるのです。これが石垣の強さの秘密ではないかと思えます。一遍に崩れることはなくて、部分的に異常は出るけれども、安定すれば、またそこでしばらくの間その形を保てるということです。

現代工学をもってしても、どうもいまだに石垣の強度は計算が難しいですね。コンクリートの擁壁は計算できるんですけども、石垣の強さについては現代工学をもってしても計算が困難なほどミステリアスな部分があつて、伝統工法恐るべしというところではないかと思っております。



これから
は、先ほど言
いました御春
屋門の解体を
例にとりまし
て石垣の状況
を説明してい
きます。上の
写真は、根元
といいますが
根石の部分で

す。非常に重要になるのですけれども、その前の部分がどうなっているかを調査しながら、進めていくわけです。この部分で言いますと、「地山」と呼んでおりますが、先ほど言った台地の自然の土が残っております、その上に石垣が乗っております。ここで見てほしいのはこのちよつと茶色っぽい黒い土のところで、実は中世の盛り土でありまして、どうも中世のお城の遺構や何かもまだこの下に残されている状況であるということです。

石は徐々にしか取れません。同時に、「トレンチ」と呼んでおりますけれども、事前に土の埋まり方を調べながら一石一石取り外していきます。こういった石垣を外す技術を持った人たちがでないと、石垣工事というのはなかなか難しいようです。最初のうちは、ぐり石が随分入っておりますが、そのうちに自然の土が出てまいります。そういった面を慎重に観察しながら、しかも一気に掘るわけにいきませんので、一^{メートル}、二^{メートル}と少しずつ測りながら下へ進んでいくということで、発掘の中でも非常に面倒くさい作業の段階になります。

次の写真は隅石で、ほかの壁の石と違い、非常に大き



くて立派な
石が入って
おります。
これは、ほ
とんど地山
といえます
か、もとの
土に近い
ている状況
ですね。こ
の状況です
と、ここに

見えているのは、やはりトレンチという試しの溝ですけれども、その下のあたりには、もう地山といえますか台地の本来の土が出ております。枅形底部のところをトレンチ調査すると、今申し上げましたように、地山がこうやって出ているという形になります。こういうふうに順序立てて石垣の解体調査を進めていきます。もちろん修復のための解体工事に伴ってやらなければならないので、そのあたりでもちよつと難しいところがございます。

下の写真の
北側のところ
は、上の方に
石垣がありま



せんでした。ですから、予想としては絶対下にあると思
っていたのですが、予想どおり、こういった石垣が
ありました。このところは、実は土に埋まっていた見え
なかったんですね。解体をしたおかげで見つかった石垣で
あると考えております。こちらは割と築城時に近く、鍋
島藩がつくった石垣なので、その特徴を示す
刻印とかいったものも見られました。最後にトレンチを
埋め戻す際に、保護をしながら慎重に進めます。最終的
には石垣をもとに戻さなければいけないものですから、
これは丁寧に土に埋め戻すことが大切なのです。

本丸御殿跡については、今の建物を建てる前に、調査を
しております。次の写真は本丸御殿の礎石です。何を調
査したかというと、実はこの下がほとんど掘れませんが



したので、石垣の礎石にどんな石を使っているのかとい
うのが主な調査項目になりました。当初、こういった形で
白川砂が撒かれておりまして、こういった礎石が残ってい
たのですけれども、その下からコンクリートみたいなもの
が出てきました、これがコンクリートなのか、あるいは昔
の漆喰の遺構なのか、それすらわからない状況で、まず
それから調べようということで調べていた時代がありま

す。そうした中で上台所の一帯北の端で溝の跡も出てき
ました。このあたりはもう既に素屋根が建っている部分
ですので、皆様に見ていただくことはできないのですけれ
ども、こういった状況であつたということをご紹介してお
きたいと思います。

次の写真は離宮時代に使われていた防火用水です。こ
れは明治時代に煉瓦でつくられた非常に頑丈なもので



す。排水
溝の部分
は築城時
のものが
そのまま
使われて
いるとこ
ろがあ
り、中を
見ると一
辺が七
〇センチ
くらい
ありま
して、ち
ょうど人
が一人腹

ばいになつて前進できるぐらいの溝です。これにはちゃん
と刻印がありましたので、恐らく築城時の暗渠排水溝だ
と考えております。発掘調査をしていくと、こういったも
のも見つけることができます。

今年の春に行った排水管、埋設管に伴う調査のときに
見つかったおもしろい遺構としては、かまど遺構がありま
す。下台所という建物の中にあつたかまど遺構だと考え

ております。このあたりはまだ正式に発表されておりま
せんけれども、こういったものが出ていることをこの機会
に紹介しておきたいと思います。

最後に、これもじっくりお話ができればと思うのです
けれども、名古屋城では、本丸御殿とか石垣だけではな
くて、今庭園の整備も考えています。例えば名勝二之丸
庭園ですが、非常にきれいな、あるいはダイナミックな石
づくりの庭が残っております。その中でも白眉なのが
池にかかっている石橋です。池の底から四メートルぐらいの比高



差があつて、非常に立体的な庭になっております。こうい
った庭なども整備して、皆さんに見ていただけるような
形になるよう、今進めております。

名古屋城は、文化財等、魅力の多い場所でありま
すので、これからもそれを少しでも歴史的な観点から見て
いただけるような形で整備できたらいいというのが私個
人の願いでもあります。少しずつ名古屋城を歴史的、文
化財的なものも含めて皆様により楽しんでいただけるよ
うな形にしていきたい、未来に残る遺跡でもありますので、
大切に守っていききたいと思っております。

資料編「考古2」から

名古屋城下町の考古学

（発掘調査の成果から）

「考古2」執筆委員 水野 裕之

（名古屋市見晴台考古資料館学芸員）

水野と申します。私は見晴台考古資料館というところに勤めております。この資料館は南区の笠寺にあり、弥生時代の集落遺跡が名古屋市の笠寺公園という都市公園になっております。そこで毎年夏に市民参加で発掘を行っており、全国的にも知られております。学芸員という肩書ですが、主に遺跡の調査をする技術職のような仕事をしております。市内では、港区を除く一五区に、遺跡と呼ばれる昔の人の暮らしの跡が残っています。ほとんどが地面の下で、九百カ所ぐらいあります。そういったところの開発に伴う発掘調査を行政としてやっております。

先ほどの講演の名古屋城の石垣の修復などとはまたちよつと違い、ビルを建てるとか道路を造るといった開発に伴って無くなってしまう前に遺跡の発掘調査を行うという仕事をしております。今回は名古屋城下町についてお話しさせていただくのですが、ここが面白そうだから掘りたいというふうにはなかなかいきません。こちらでは掘る場所を選べないという仕事です。今日お話するのは、私が勤めてから二五年ぐらいの間に発掘調査を行ってきたところの内で、小規模な地点も含めて色々城下町に関係する地点について、その一部ではありますがご紹介させていただきますと思います。

名古屋市内には、縄文時代とか弥生時代とかいう古い



時代の遺跡もありま
すけれども、ここで取
り上げます遺跡は、
名古屋城下町という
大きな都市の遺跡で
す。京都の平安京と
か奈良の平城京とか
いった都市の遺跡が
ありますけれども、
名古屋の都市の遺跡
というと、やはり名
古屋城下町というこ

とになります。ただ、東京の江戸もそうですが、城下町
全部を遺跡として取り扱おうとしますとものすごい範囲
となり、とても開発を止めるわけにはいきませんので、一
部の可能な地点ということになります。江戸時代単独の
遺跡は、各自自治体で重要と思われる地点を遺跡として扱
ってよいというようなユアンスが国の方針です。そういつ
たことを前提に、今日は江戸時代の名古屋城下町の発掘
調査の成果をお話いたします。

熱田神宮から名古屋城に至る台地上には、古くからの
遺跡も分布しています。考古学でも地形や立地はかなり
意味があると考えます。古くは旧石器時代、名古屋の場
合ですと三万年ぐらい前から人が活動していたと考えら
れています。ちょうど白川公園の西側の中消防署とか洲
崎神社とか、この辺りの「堅三蔵通遺跡」と呼んでいると
ころは、名古屋で最も早くから人が住んでいた場所です。
城下町と重なるように、縄文時代、弥生時代にわたって
ずっと人が住んでいました。名古屋市内では主に中区に
あたる場所の歴史が古く、一番古い時代の遺跡が残って

いると言ってもいいぐらいのところでは、今日のお話は城
下町についてですが、その区域は、お城の三之丸より外側
の中・下級武士とか町人が住む部分、お城からの方角で
言えば南側、東側、そして北西側、西側の低地部分にも
及んでいます。これが現在の名古屋市の形のもとになって
いることはよく知られているかと思えます。

遺跡の調査を行っていると、たまたま城下町と重複
する古い時代の遺跡に当たることがあります。弥生時代
や古墳時代の遺跡として知られているところで、その後江
戸時代になって城下町になっているところは、大体同じ地
盤に当時の人が住んでいたものですから、台地の上です
と、本当に五〇センチですが、一メートル深くないところに、こ
こを考古学や発掘調査では「地山」と呼んでおりますが、
名古屋台地をつくる黄色っぽい土が出ます。この部分に、
縄文・弥生時代とか江戸時代に住んでいた人々の、溝を掘
るなり井戸を掘るなり、その地面で作業し生活を営んで
いた痕跡が遺跡となって見つかるわけです。これから、そ
ういった考古学の成果について、ちよつと古いものが多いの
ですけれども、説明をさせていただきますが、その前に、
考古資料のほかに関連する文献資料もありますのでそれ
を先に紹介させていただきます。

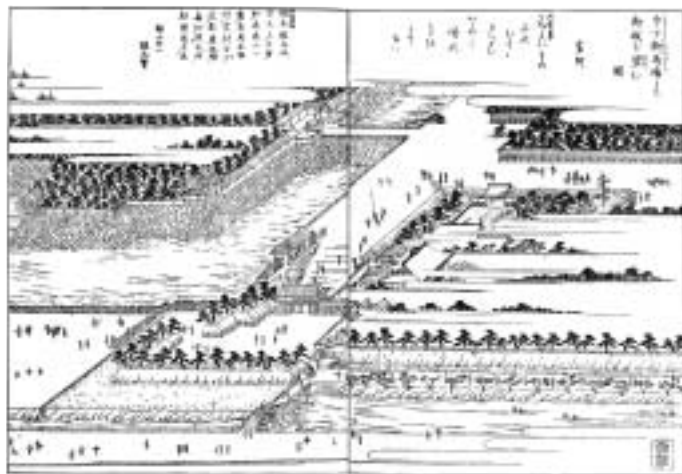
名古屋城下町が江戸時代にどういったふう記録され
ているかという城下絵図もその一つです。城下町の絵図が
ありますと、今度この遺跡を掘るけれども江戸時代は
何があったのだろうと、おおよその目安を付けることが
できます。武家地なのか、町屋の場所なのか、寺町の跡な
のか、そういったことがあらかじめ分かかって調査できると
いうことは、考古学では、先史時代、歴史記録の無い時
代ですとなかなか無いことですので、非常にわくわくす
るわけです。そういった文献資料、絵図とか文字に出てく

る名古屋というのを、資料により一部ご紹介いたします。

『南総里見八犬伝』を書いたことで有名な滝沢馬琴という人がいますけれども、この人が関西方面へ旅行をしたときの記録の中で、「名古屋は男女の風俗、もっぱら大坂をまなぶなり……人気の闊達なるは江戸にならうなり。客齋（りんしょく）は京をまなべり」と名古屋人の特色を書いています。東と西の間である名古屋ということでは、現在もなるほどと思う点が幾つかありますし、京の人には一向に通じない江戸の戯作狂文も名古屋まではよく通じるとありまして、アクセント的には、愛知県、名古屋までは関東圏のアクセントになりますので、そういったことにも何か関係するのかなと思います。その次には「名古屋の女子顔色の美なるも、腰は大に太し、一人として細腰なるはなし。これ風土によるにや。」とも記されています。

次に、『尾張名所図会』という幕末頃の地元の記録です。

これは、小田切春江など民間の手による地誌で、名所旧跡等を訪ね詳細な絵を付して解説を加えたもので、天保一五年（一八四四）に城下の本屋から出版されました。こ



れらの絵からは、発掘調査する城下町遺構付近の当時の様子を具体的にイメージすることができかなり参考にあります。

上の図は巾下門の絵で、名古屋城を西から眺めたところです。右

上に「巾下新馬場より御城を望む図」とあります。次の図は、かつて三之丸にあった家康を祭った東照宮の絵です。この絵

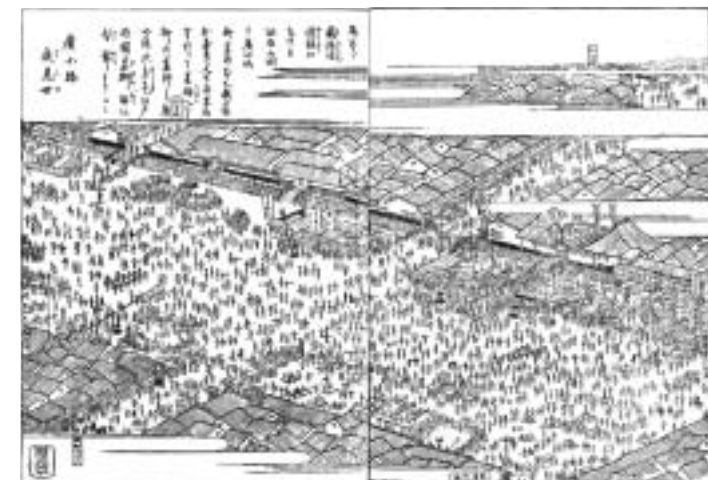


の左手に二代將軍秀忠以降の歴代將軍の御霊屋がありました。現在は、名古屋城の正門の南側の駐車場になつてるところ、能楽堂のすぐ東側の広くなつているところに御霊屋がありました。その東側にこの図の東照宮があり、そのさらに東側に天王社があつたわけですが、その御霊屋の敷地と考えられる地点を発掘調査いたしました。

下の図は、ご存じ広小路通の状況を写したものです。一部道の上側に用水などがあつたことが分かります。広小路通界限は、遺跡になっていない関係からなかなか掘って確かめることができていないのですが、城下町の中心部

ではこういった風景が続いていたのだろうなと見てとれます。

次頁の図は、現在の白川公園の辺りです。今は、科学館とか美術館が建っていますが、



江戸時代には南寺町と呼ばれていた地域です。美術館を建てる前にお寺のお墓になつていたところを調査しましたが、そういった地点です。それから、この図の右上に、橋が架かってちよつと蛇行した川があります。これが恐らく紫川です。科学館の北西で南へ屈曲し、今の伏見通の西側を南下し、若宮大通で西に折れて洲崎橋辺りで堀川へつながる川でした。それを紫川と呼んでいたのですけれども、こういった部分も一部残っていることが調査で見つかりました。

それから、江戸時代後期の『尾張名陽図会』には、大変興味深い絵が載っております。「長嶋町通 御城御普請之芥捨場」と書かれておりまして、この通りの名は、今でもあるかと思いますが、大きな穴を掘って、お城の普請のときに出た瓦礫など色々なものをそこに捨てている様子が描かれております。考古学の発掘では、当時の人が捨て



たがらくたが詰まった穴を「廃棄土坑」と呼んでいますが、けれども、まさにそれが造られている情景が描かれた非常に興味深い絵なのです。私どもは、古い時代に埋められたものを

見つけては掘り返し、茶碗のかけらを宝物のように拾って調べるといふ仕事をしているのですが、ちょうど江戸時代にその穴を掘ってごみを捨てているところの様子が描かれております。

こういった当時の情景を目に浮かべていただきつつ、次に、私がする様々な都市の遺跡についてのお話を聞いていただければ幸いです。この仕事に携わって二五年余りになりました。弥生時代の遺跡を掘ったり、古墳を掘ったり、色々ありましたが、たまたま私が担当したところでも城下町と絡むところがだんだん増えてきました。それを簡単にまとめ、お話をさせていただきます。

名古屋城下では、三之丸の重臣屋敷地、城下町の武家地、寺社地、町地（商人、職人の住む町人地）の区画割が慶長一七年（一六二二）頃に行なわれました。これに伴っ

て「碁盤割」の町割や道路などが整備されていきました。発掘調査によつて、これらの区画割に関係すると思われる、幅、深さとも一メートル内外の地山を掘り込んで造られた直線状の溝が見つかっています。又、三之丸や城下町の整備の際に整然と造られた道路は、今は拡幅されたり舗装されているものの、その面影は街の随所で見ることが出来ます。当時の道路そのものの検出例は多くありませんが、名古屋城三の丸遺跡（第一次調査）や幅下遺跡（第四次調査）では、城下絵図や明治時代の地籍図などから検出部分の位置が推定できた道路の遺構が見つかっています。

さて、一つ具体的な発掘例をお話いたしましょう。名古屋城三之丸の一郭で、今は名古屋市公館が建っているところを発掘いたしました。この辺りはかなり身分の高い武家地でした。国税局のすぐ向かいといえますが横になります。ここで、三之丸の街区の道の跡と武家屋敷地の角地が出てきました。

ここでは屋敷地のかなりしつかりした塀の基礎の跡が残っていました。溝が切っておりまして、もう江戸時代の初期には埋められたと推定される状況で、町割の区画溝と思われれます。街区の道の跡では、大きな穴の跡も見つかりました。道路ができてからこんな大穴を掘るはずはありませんので、築城工事の際に屋敷を建てたときの廃材とかがらを捨てるための穴が道路に大きく掘られ、やはり江戸時代初期には埋められたと推定されます。

次に井戸の跡を見つけたお話をいたします。

名古屋城は、標高一〇〇メートルほどの台地（更新世の熱田台地）上に立地していますが、堀川以東のこの台地上の城下町では、生活用水として井戸を使用していました。

よく建築現場で地盤調査のために行っていますボーリング調査では、一〇メートル、二〇メートル、三〇メートルと掘るのですけ

れども、発掘場所は御霊屋が見つかった名古屋城の正門前でした。井戸は、直径が一メートル一〇センチですとか、大きい井戸ですと一メートル五〇センチ近くありました。中に埋まった土は、井戸底までは安全上なかなか掘ることができないのですが、たまたまこの地点は中部電力の地下変電所を造るために事前の調査をいたしましたので、そのボーリング工事をしているところと契約し、二カ所ほどパイプで土を確かめながら地質調査で井戸の深さを調べました。

後から埋めた土は、地山の黄色い土とは違う土ですので、何メートルまでいけば地盤の地山の黄色い土が出るかというところで調べたところ、大体八メートルぐらいでした。この井戸が使われていたとすると、江戸時代当時の井戸は八メートルの深さだったと推定されます。同じく、戦国時代の那古野城のあった時代の井戸もこの近くで調査しましたが、そこは七メートルぐらいでした。この工事の人にデータを聞いたのですけれども、現在は一〇メートルぐらい掘らないと水が出ないそうです。ということは、古い時代ほど浅く掘っただけで水が出たということです。ちょっと少ない例で大ざっぱですけれども、昔の方が森や林がいっぱいあって、地面に保水力があったのかなと思います。今ではみなアスファルトで覆われ、水が全部浸透しない状態になっていますので、そのためにどんどん水位が下がったというようなことも考えられるのではないかと思います。

次に、城下町に敷設されていた水道のお話をいたしましょう。西区の幅下小学校の体育館を建て替えたときの調査です。城下絵図などを見ますと、そこは町人が住んでいた区域に当たりまして、真つすぐ溝状になっている箇所が発掘されました。これは「巾下水道」と呼んでいるものでした。お堀の西北隅櫓の近くに龍ノ口と呼んでいるバス停がありますけれども、キャッスルホテルの南側の辺

からずっと浅間町の南北の方に、当時の道路に今の水道管やガス管と同じように引かれた「巾下水道」がありました。この地点では、現在の地表から一メートルぐらい下に、竹の節を抜いた管、木を樋状にくり抜いて上に蓋をした水道管が見つかりました。

この辺りは台地ではなくて沖積地でして、江戸時代、ちょうど尾張藩主二代光友のとき、一六六三年頃から計画された「巾下水道」が生活用水として使用されました。これは、現在の守山区竜泉寺西の白沢川が庄内川へ流れ込む付近から取水し、「御用水」を通して導水された名古屋城の堀の水を地下に埋設した木樋や木樋でつないで「巾下」の武家屋敷地や町人地へ給水したものです。水道が敷



設された理由ですが、城下町のうち堀川以西や北西部の低地に位置する所では、地下水の水質が悪かったためと考えられます。江戸後期になると深掘りの技術ができるのですけれども、江戸初期の当時は、深く掘ることができず、低地の「巾下」と呼ばれていた辺りでは、どうも井戸水がちよと美味しくなかったのか、どぶ臭ったのか、そういったことで水道が引かれた

ようです。ここでは、そういった遺構が多く見つかりました。

例えば、二五センチ角ぐらいの木の水道管や竹の水道管が見つかりました。継ぎ手があつて、差し込んで角度を変えられるようになっており、隙間には棕櫚縄などゴムのパッキンの役割を果たす物が付けてありました。詰まったり腐ったりしてしばしば付け替えたようで、重複した複雑な状況で見つかっております。水道施設の一部である井戸も見つかりました。上水井戸と呼んでおりますけれども、



底板があつて、地表から一メートルちよと下ですから、多分地上に井筒があつて、柄の長いひしゃくで汲み上げて使われていたものです。

次に、旧紫川の跡を発掘したときのお話をいたします。場所は、若宮大通のちょうど白川公園の

南西の辺りです。一九八〇年代、N・T・Tの共同溝の建設のときの調査で、かなり古い調査なのですが、川の跡が出て参りました。その石垣は角石と玉石があつて、玉石の方はどうも明治以降に修復した箇所のようにでした。

当時、洲崎神社の近くにお住まいの高齢の方が、子供の頃は、この辺りに川があつて紫川と呼んでいたと言っておられました。戦後の復興でごみ捨て場になつてしまつて、

名古屋市が埋め立てて若宮大通を造ったということで、その戦前の状況を示すものでした。もともとは江戸時代に造られて、整備されていた川です。先ほどの水道に対する下水の関係ですが、城下町の汚水とか排水を、紫川ですとか、広小路の絵図に用水みたいなものが幾つかありましたので、そういったもので一部堀川に流し込んでいたのではないかと思います。

次に、隣接する南寺町にあった養林寺と思われる敷地の墓地であった地点の調査についてお話いたします。

ここは科学館の南東側の美術館予定地で、この辺り一帯を白川公園遺跡と呼んでいますけれども、戦後、白川公園のところに駐留米軍の家族用住宅、いわゆるアメリカ村が設けられたときに、戦前まで寺町にあつたお寺の墓がすべて平和公園の方などに整理され、お寺も各区に移転してしまいました。その際、墓標とか墓石は全部撤去されたのですが、残りの下の方は全く置き去りにされたようで、掘る前は全く予想していなかったのですが、頭蓋骨とか歯、あごの骨とか、百体以上出てきました。ごい状態でした。明治時代ぐらいのものもあつたのですが、江戸時代の前期のものも含まれていて、かなりいい状態で残っております。調査地点は、かつて南北に並行して延びる墓道とこれに沿った墓坑列の整然とした墓地であつたと思われませんが、検出された墓坑は、以前作られた墓坑と重複して遺体が埋葬されている例が多く、敷地に窮していたのかもしれない。お墓の密集する箇所とない箇所がありました。概ね、きちつと整備された都市の中の墓地と言えらると思われました。

副葬品も色々出土しました。考古学では土器とか茶碗で大体時代が分かるのですが、一七世紀末から一八世紀初めぐらいの伊万里焼と呼んでいる染付磁器もあり

ました。六道銭や土人形などのほか、生前愛用していたものが一緒に埋められることが多かったのでしょう、女性の方ですとかんざしとか鏡とか、あと、煙草の煙管とか徳利とかお茶碗とか基石などもありまして、様々な副葬品が出て参りました。お酒好きの人のお墓であったとか、墓が好きで人であったとか。当時の暮らしぶりが想像されました。

次のお話は、「巾下水道」があったところで見つかった商家の跡についてです。名古屋城下町のうち町人の住む地域の発掘調査は少なく、貴重な事例でした。昭和初期の住居地図というのがありまして、それを見たところ「井桁屋」と表示がありました。ご子孫の方に伺いますと、清洲越し以来、味噌、たまり、お酒を造る醸造業を営んでいたそうで、ここには、周りを粘土と瓦の破片で固めたような焚き口があつて、ここに大きな釜戸を置いて、恐らくは米や大豆を蒸す「釜場（かまば）」と呼ばれていた作業場だったのでしょう。これ以外に、大きな木で組んだ浴槽状の搾り場みたいところ、これを「槽場（ふなば）」と呼んでいます。そうしたものも見つかっております。当時は水道を引くことは、かなりのお金がかかったと思われませんが、やはりこういう町屋の造酒屋さんといった所で水道がたくさん使われていたということが分かる、そういった調査地点でした。

次に堅三蔵通遺跡と呼んでいる場所のお話をいたします。ここからは縄文時代から弥生時代のももの見つかりますが、江戸時代この辺りは、城下の南端に近い南寺町の西側に位置し、物資の運搬に便利な堀川に沿って尾張藩の蔵を囲むように建ち並ぶ中級・下級武士の住む武家屋敷地で、当時は敷地が広いものですから、建物以外のスペースで裏庭といった場所に穴を掘ってはごみを捨てて

いたようです。ごみの穴が無数にあり、大きなものでは、三斗、四斗ぐらいの径のあるものがありました。

また、場所によっては、単なるごみ捨て穴ではなくて、土蔵の役目をはたしたのもあったようです。江戸や京都でも、地下室（ちかむろ）といって、火災のときに大事なものを放り投げておく地下蔵みたいな役割を持つものがあります。この地点で発掘されたもので形の整ったものはそういう性格のものなのだろうと考えています。この地点の発掘調査からは、建物のスペースと地下室や井戸などの設けられたスペースが、江戸時代前半と後半で入れ替わっている箇所があり、江戸時代を通じてある程度固定化された敷地内での土地利用の仕方の痕跡を見ることができました。

次に御霊屋があった付近の発掘のお話をいたします。う。名古屋城の正門前に天王社、東照宮があり、その隣に御霊屋があったのですが、明治五年ぐらいに陸軍用地になった際に、御霊屋などを全部壊してしまいました。そのときに、巨大な穴を掘って瓦礫などを捨てたところです。木材部分などは腐って見つかりませんが、瓦ですとか陶磁器が見つかりました。中には御霊屋に使われていたと推測される三葉葵紋が付いた金



箔瓦の一部も見つかりました。

又、屋根の大棟の飾りに付けられた三葉葵紋の胴板瓦も複数見つかりましたが、これは、普通のいぶし焼きの瓦ではなくて、こげ茶色の鉄釉が掛かった陶器質の瓦でした。瀬戸や美濃でこれを焼いていた場所が見つかっていませんので、特別注文でどこかの場所で焼かれたのではないかと言われています。一部に金粉だか金泥の付いていた名残がありましたので、多分こういったものにも金が張ってあったのではないかと考えられます。

この瓦の裏には、鉄釉で「焼師市左衛門」と書かれ、さらに「延享二年（一七四五） 丑十一月」という年号と「瓦



し 権右門作 御瓦師 加藤彦兵衛 斎加六左衛門」と刻まれ、尾張藩の御用瓦師等の名前がありました。考古学では、年号が書いてあったりするものを一級資料などといいます。焼き物などではあまりそういうものが見つかりませんので、なかなか制作年代を確定することが難しいわけですが、こういう貴重な資料もそのときに見つか

りました。

このほか、雲に乗った立体的な姿の龍の装飾付きの瓦がばりばりに壊れた状態で見つかりました。緑色の釉と鉄色の釉と白い素地でもって三色に表現されています。焼成状態や胎土から恐らく先ほどの三葉葵紋の瓦と同時代、一八世紀中頃の作品と思われます。特に緑色の釉が



掛かっていることが注目されます。江戸前期に織部焼きがつくられ、幕末には再び織部が焼かれるようになるのですが、ちょうどこの頃はあまり緑色の釉薬が使われていない時期ですので、なかなか貴重な資料といえます。残念ながら頭の部分が見つかっていませんが、爪とか角の破片は一部見つかっております。

次は火災の跡のお話です。先ほどもお話しした井桁屋さ



われた陶磁器の破片が出てきますので、恐らくはその頃にこの場所が火事で焼け、その後に焼けた物を整理・処分した土坑なのだろうと思われます。こういった火事の記録の一部が、市消防局から昭和四八年に発行された「名古屋の火災記録集成」に記載されており、一七七八年頃とか一八〇四年頃に江川端、六句町、戸田町一帯の区域を焼失したという記録がありましたから、そのどれかによりこの辺りも類焼というか大火事があった、そういうことを示す遺構ではないかと思われます。

最後になりましたが、火打金と火打石のお話をいたしましょう。火打金は、錆が付いてしまったものですが、堅三蔵通遺跡で火打石と共に出土、また幅下小学校では火打石が出土しています。これらは火を付ける道具ですが、明治十数年になってマッチができるまで、おそらく古墳時代からか、奈良時代にははっきり出てきますが、同じよ

んという味噌やたまりを造っていた場所であるの幅下小学校の辺りのことです。この地点の調査で焼けた陶磁器や焼けた土、瓦などがいっぱい詰まった穴が一〇カ所ほど見つかりました。どの穴からも大体西暦一八

うなものが使われてきました。火打金は形で分かるのですけれども、火打石は、普通の石ころとなかなか区別がつかないので、発掘調査で見つけることがなかなか難しいものです。火花の出る石というのは、ガラス質といつか多くは、チャートという石です。石器時代の石器と似ているのですけれども、角がある稜線のところは細かくつぶれて、物によつては鉄さびが付いています。江戸で使われていた火打石を見つけた人の報告書などを見まして、名古屋にもあるはずだと考え、「小さな小石も、出てきたら全部拾ってください。」というふうにして作業をしましたところ、やっぱり幾つか出てきました。火打金と火打石というような今まで見落とされがちだった生活の道具も遺跡に残っているのだということが分かってきました。

以上、ご紹介できましたのは、全体の発掘調査のほんの一部ですけれども、名古屋の城下町の様々な暮らしぶりをうかがうことができたと思います。寺町だったり、町屋の部分だったり、あと、三之丸からは大きな屋敷と築地塀のような基礎が出てきたり、場所によつて徐々に色々見えてきています。名古屋市の資料編にも都市の遺跡としての城下町をなるべくたくさん紹介していけたらと思っております。

「出土品・遺構の写真は、名古屋市見晴台考古資料館提供」

資料編刊行計画（予定）

平成二十三年度	現代
平成二十四年度	考古2
平成二十五年度	近代3

『新修 名古屋市史』資料編(7巻)・本文編(全10巻)発売中

『新修名古屋市史』は現在の名古屋市域を対象とした、原始・古代から現代に至るはじめての通史です。図・表・写真を豊富に取り入れ、それまでの研究成果を踏まえつつ、平易に読める市民のための市史として本文編全10巻を発刊しています。

また、本文編に引き続いて、資料編(全11巻)の刊行を継続しています。現在までに資料編を7巻刊行しており、この5月には資料編「近世3」の販売の開始を予定しています。



●巻 構 成

資料編(監修者 元愛知県立大学長 塩澤 君夫)

巻	時 代 等	編集委員(肩書きは当時のもの)	頁 数 ・ 付図等
近代1	明治4年～40年頃	名城大学非常勤講師 故小林 賢治	915頁
近世1	尾張藩創設～明治4年	愛知学院大学名誉教授 林 董一	968頁
考古1	旧石器～古墳時代	愛知県立松蔭高等学校長 加藤 安信	965頁
自 然	自然編	名古屋大学教授 海津 正倫	548頁 オールカラー 目録 228頁
近代2	大正～昭和時代(戦前)	名古屋学院大学教授 笠井 雅直	997頁
民 俗	民俗編	元名古屋芸術大学非常勤講師 津田 豊彦	974頁
近世2	江戸時代前期	愛知学院大学名誉教授 林 董一	879頁
近世3	江戸時代後期	愛知教育大学名誉教授 吉永 昭	約900頁 平成23年5月販売開始の予定

本文編(監修者 学習院大学名誉教授 故大石 慎三郎)

巻	時 代 等	編集委員(肩書きは当時のもの)	頁 数 ・ 付図等
第1巻	旧石器～平安時代	日本福祉大学 福岡 猛志	894頁 遺跡地名表・遺跡分布地図
第2巻	鎌倉～安土・桃山時代	名古屋大学教授 三鬼清一郎	868頁 円覚寺領尾張国富田荘絵図 他2点
第3巻	江戸時代前期	愛知学院大学教授 林 董一	984頁 享元絵巻 他2点
第4巻	江戸時代後期	愛知教育大学名誉教授 吉永 昭	922頁
第5巻	明治時代	前愛知県立大学長 塩澤 君夫 金城学院大学教授 故近藤 哲生	931頁 改正愛知県名古屋明細図 他2点
第6巻	大正～昭和時代(戦前)	金城学院大学教授 故近藤 哲生	945頁 名古屋市實測圖 他2点
第7巻	昭和時代(戦後)	元名古屋市博物館副館長 故久住 典夫	1,017頁
第8巻	自然編	名古屋大学教授 海津 正倫	428頁 オールカラー
第9巻	民俗編	名古屋芸術大学非常勤講師 津田 豊彦	924頁
第10巻	年表・索引		450頁 第1～9巻本文収録のCD-ROM

●定 価

各巻4,500円

●販 売 方 法

市民情報センター内販売コーナー(市役所西庁舎1階)、市政資料館、名古屋城内正門横売店、名古屋都市センターまちづくりライブラリー(金山南ビル12階)で購入できます。また最寄りの書店からも注文できます。

●お問い合わせ先

名古屋市市政資料館 〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目3番地
TEL(052)953-0051 FAX(052)953-4398

公文書等の公開について（市政資料館の閲覧室で閲覧・複写していただけます。）

○「公文書」の公開

市政資料館では、明治から昭和に至る名古屋市の公文書を整理・保存し、公開（閲覧・複写）しています。平成22年度は、昭和54年度までに完結し整理の終了した公文書513簿冊を新たに公開しました。このうち、149簿冊については個人情報等を保護するため、簿冊の一部を利用制限しています。これまでの公開分とあわせて、10,161冊が利用できます。

【新たに公開した主な公文書】

*「 」内は簿冊名、（ ）内は簿冊の完結年度

- 「分所移転に関する書類（東区） 大正12年3月」（大正11年度）
- 「功績者表彰に関する綴（東区） 昭和6年11月3日」（昭和6年度）
- 「監査結果の報告関係書類（監査復命書） 昭和7年6月～昭和8年7月」（昭和8年度）
- 「公舎関係書類 昭和15年度～17年度」（昭和17年度）
- 「東山荘建物関係書類」（昭和18年度）
- 「監査計画書類（計第1号） 昭和9年6月～昭和18年5月」（昭和18年度）
- 「決算審査関係書類綴 昭和21年度分（昭和22年6月起）」（昭和22年度）
- 「出納検査関係書類 昭和28年3月分～昭和29年5月分」（昭和29年度）
- 「庁舎及び財産並びに契約に関する綴」（昭和32年度）
- 「設立認可申請書 高杉土地地区画整理組合」（昭和32年度）
- 「耐火建築国庫補助綴 昭和31年度起」（昭和34年度）
- 「仁王門地区・白川町地区防災建築街区指定申請 昭和36年度」（昭和36年度）
- 「監査委員会議録 昭和52年度」（昭和52年度）
- 「名古屋都市計画中央卸売市場変更決裁綴」（昭和53年度）
- 「公衆便所の都市公園内第三者設置許可関係綴」（昭和54年度）
- 「就園奨励補助（国庫補助金） 昭和54年度」（昭和54年度）



○「行政資料」の公開

名古屋市が発行した刊行物や地図・写真など59,112冊（平成22年12月末時点）を利用できます。

○「市史資料」の公開

新修名古屋市の編さん過程で収集した資料のうち整理が終わったものを複製（紙焼本）により1,898冊公開しています（個人情報等を保護するため、資料の一部を利用制限しています）。

表紙の説明



名古屋汎太平洋平和博覧会ポスター 昭和12年
（名古屋市市政資料館所蔵）

戦前では国際的かつ最大規模の開催となった博覧会の公式ポスター。名古屋生まれの今でいうグラフィックデザイナーであった杉本健吉氏のデザインを採用し、海外の観客誘致のため制作されたもの。



消失前の本丸御殿と天守閣
（名古屋市市政資料館所蔵）

かつて名古屋城の本丸には、天守閣の南側に本丸御殿があった。勇壮な天守閣と優美な御殿が並び建ち、ともに国宝に指定されたが惜しくも昭和20年5月の空襲により、天守閣、本丸御殿ともに焼失。

資料編「近世3」刊行にあたって

「近世3」編集委員 吉永 昭

資料編近世では、全三巻刊行を予定、既に近世1・2が刊行され、今回、その最後にあたる近世3が刊行されることになりました。

今回の資料編では、既刊の本文編第四巻を編集するにあたって収集した資料を中心に、それ以降新しく発見された資料をも加え、全体を四章構成に分けて各章ごとに良質の資料を選択、収録することに努めました。

第一章の藩政の展開では、当時における社会経済の変化や青松葉事件をも含む緊迫した時期の資料などを、第二章の商工業の発展と生活の変化では、町民らの生活必需品の流通や城下の拡大とそこでの人々の生活の実態を示す資料などを、第三章の交通では、鳴海・熱田両宿を中心に、その実態を示す資料を、第四章の文化では、国学・儒学・洋学・医学や大衆文芸、さらに出版・芸能などに関する諸資料などを収録しました。

今回、資料編に収録できた資料は、全体のごく一部に過ぎず、なお、多くの貴重な資料が残されたままになっております。これらの収集資料が今後、市民の方々の共有財産として永久に保存され、広く公開・利用されることを期待したいと考えます。

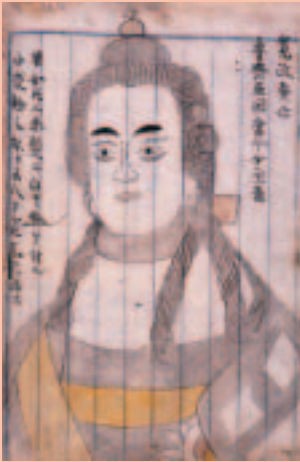
資料編「近世3」刊行のお知らせ

資料編「近世3」が刊行されます。既に刊行されている本文編第四巻と併せてご覧ください。

体裁 B5判 約九〇〇頁 上製本 箱入り

(平成二十三年五月販売開始予定)

定価 四千五百円



赤夷談
(刈谷市中央図書館所蔵)

ロシア女帝エカテリーナ二世の肖像画。この資料は口絵に掲載されています。

資料編「近世3」目次

第一章 藩政の展開

第一節 政治と社会

第二節 村々と人口

第三節 藩政と家中

第四節 開国と攘夷

第五節 藩の編さん事業

第二章 商工業の発展と生活の変化

第一節 商工業の発展

一 酒造業の展開／二 正米取引と延米取引／三 味噌・溜まり・醤油業／四 魚問屋仲間と仲買・小座たち

第二節 生活の変化

一 町の生活／二 災害と施行

第三章 交通

第一節 鳴海宿

一 鳴海宿の状況／二 通行者と宿継／三 旅籠屋と飯売女／四 宿財政とその窮乏／五 助郷村々及び宿と助郷村々の抗争

第二節 熱田宿

一 熱田宿の状況と推移／二 本陣南部家と宿場をめぐる動き／三 熱田宿の助郷

第三節 尾張廻船と堀川水運

一 熱田湊をめぐる海運／二 堀川をめぐる水運

第四章 文化

第一節 江戸中期

一 国学と政治改革／二 儒学・洋学の国学批判論／三 蘭学・洋学

第二節 江戸後期

一 国学の展開／二 大衆文芸

第三節 出版文化と薬品会

一 出版文化 本屋の出版目録と提携書林／二 藩医・浅井家と医学の発達 尾張医学館薬品会／三 学会の展開 本草学から博物学へ

第四節 町人の文芸活動

一 香道／二 常磐津

名古屋市市政資料館

所在地 〒461-0011 名古屋市東区白壁一丁目3番地
(TEL) 052-953-0051 (FAX) 052-953-4398

交通案内 地下鉄名城線「市役所」下車 東へ徒歩8分
市バス・名鉄バス「清水口」下車 南西へ徒歩8分
市バス・名鉄バス「市役所」下車 東へ徒歩8分
市バス・メーグル「市政資料館南」下車 北へ徒歩5分
名鉄瀬戸線「東大手」下車 南へ徒歩5分

開館時間 午前9:00～午後5:00

休館日 月曜日(休日の場合はその直後の平日)、
毎月第3木曜日(休日の場合は第4木曜日)、
12月29日～1月3日

ホームページは「名古屋市市政資料館案内」で検索してください。
公文書目録のダウンロードや集会室(半日1,000円～)・展示室(全日1,000円～)の予約状況などをご覧ください。

公共
交通機関を
ご利用下さい

